

彦次郎の冒険
旅のコックさん



作：みつざわ ひろし

昔々あるところに、彦次郎という名前の子供がいました。彦次郎はお侍さんの子供です。

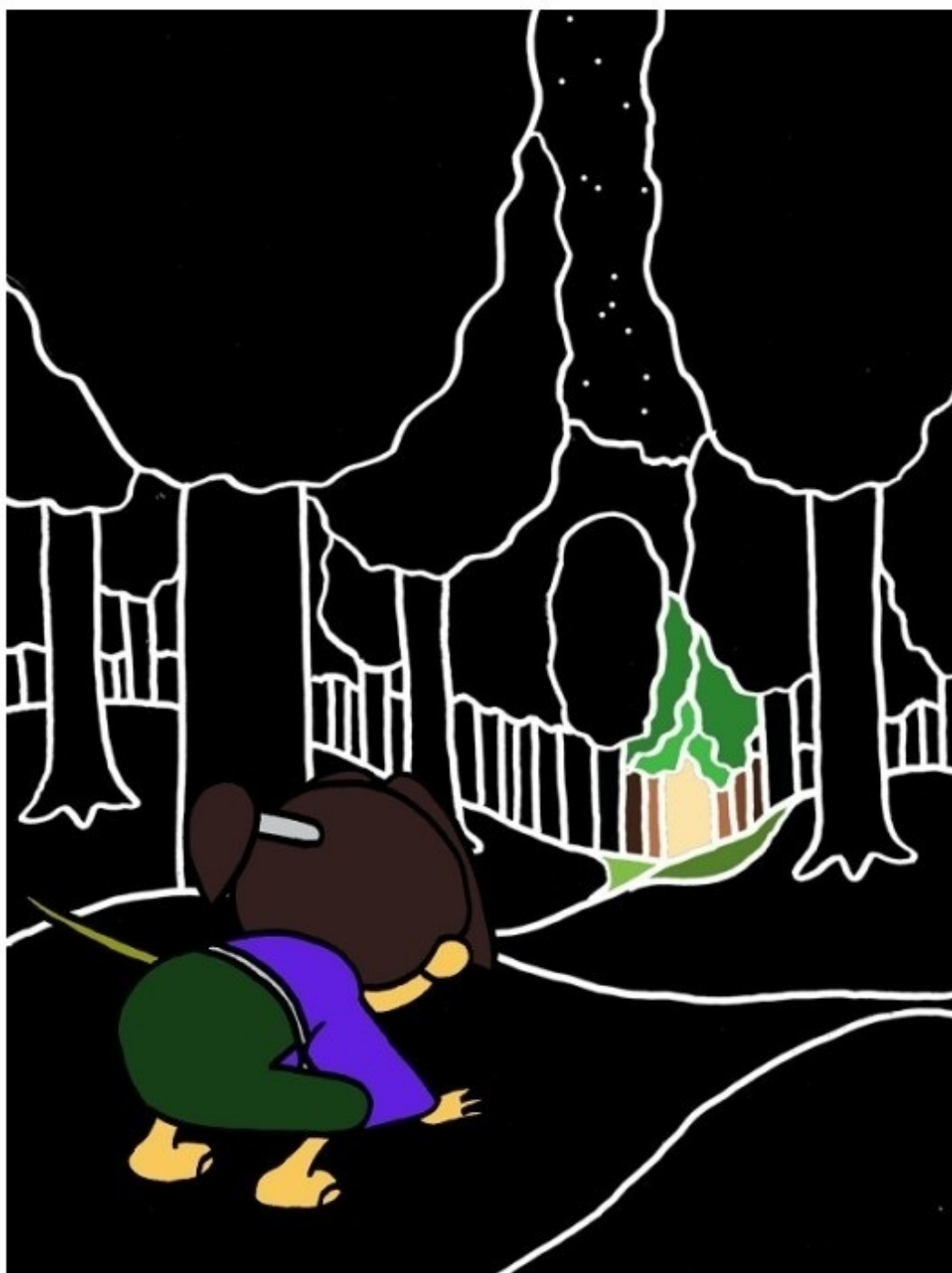
あるとき、彦次郎とお父さんの乗っている船が海ぞくにおそわれて、二人ははなればなれになってしまいました。その日から、お父さんを探す彦次郎の旅がはじまったのでした。



彦次郎は独りぼっちで森の中を歩いていました。やがて日が沈みはじめて、あたりは暗くなってきました。夜の森はとても怖いところなのです。彦次郎は心細くなってきましたが、歩きつづけるしかありません。



森の中はすっかり暗くなってもう何も見えません。とうとう彦次郎は一步も歩けなくなってしまいました。彦次郎は怖くなってまわりをキョロキョロ見まわすと、森の奥のほうにぼんやりと明かりが見えました。彦次郎はその明かりに少しずつ近づいていきました。



ようやく明かりの場所にたどり着いてみると、そこにはたき火をする旅人がいました。

旅人は彦次郎を見つけると驚いたようすで言いました。

「おや、君みたいな子供がこんな所でどうしたんだい？」
彦次郎は人に出会えたことが嬉しくてたまりません。

「とにかくこっちへ来て火にあたりなよ。おなかも減ってるだろ？」



彦次郎はたき火のそばにすわりました。

「僕の名前は彦次郎。助けてくれてありがとう。」

彦次郎は言いました。

「僕はコックのセイモルだ。旅をしながら料理の勉強をしてるんだよ。」

そう言うと、セイモルは山ブドウのジュースが入ったコップを彦次郎にさしだしました。



そして、セイモルは袋からキノコと塩漬けのお肉を取り出すと料理をはじめました。キノコとお肉を切る。それを鍋に入れて炒める。その鍋にお水とゲッケイジュの葉っぱを入れてコトコト煮込む。最後にお塩とコショウを入れる。そんなふうに料理を上手に作っているセイモルを、彦次郎は楽しそうに見ていました。



「さあ、キノコのスープだ。おいしいよ。」
セイモルはそう言って、スープのお皿を彦次郎にわたしました。
彦次郎はスープを一口食べると言いました。
「おいしい！こんなにおいしいものは食べたことがないよ。」
スープを食べる彦次郎を見ながら、セイモルはたずねました。
「どうして君は一人でこんな森にいるんだい？」



遠いふるさとのこと、海ぞくにおそわれたこと、お父さんとはなればなれになったこと、彦次郎は今までのできごとをセイモルに話しました。

彦次郎の話聞いていたセイモルは言いました。

「お父さんを探すなら大きな町に行ったほうがいいよ。お父さんのことを知っている人がいるかもしれないからね。」



「僕はお城の町まで行く途中なんだけど、その町まで僕と一緒に
行くかい？」

セイモルがそうたずねると、

「うん、セイモルと一緒に行く。」

と、彦次郎は嬉しそうに答えました。

次の日の朝、二人は町をめざして出発しました。



彦次郎とセイモルはひたすら歩きました。途中でイチジクの木を見つけると、イチジクをいくつか袋に入れてまた歩きはじめました。夕焼けで空が赤くなったところに二人は川を見つけたので、そこで夜を過ごすことにしました。川でとった魚とイチジクがその日の晩ごはんです。



朝になって彦次郎とセイモルはまた旅をつづけました。
二人が歩いていると、まっくろな雲が空いっぱい広がってき
て風も強くなってきました。セイモルは言いました。
「もうすぐ嵐が来るよ。どこかにかくれないと…」
セイモルは彦次郎の手をつかんで走り出しました。



とうとう雨がふってきました。風はますます強くなってきます。二人がどんなにがんばって走ってもなかなか前に進めません。そんなとき、セイモルはほら穴を見つけました。
「嵐がおさまるまであそこにかくれていよう。」
セイモルがそう言うと、二人はそのほら穴に逃げこみました。



ほら穴の中はまっ暗なので、セイモルは火をおこしてたき火をはじめました。しだいにほら穴の中が明るくなってきました。すると彦次郎はほら穴の奥に何か動くものを見つけました。近づいてみるとそれは大きな猪だったので二人はびっくりしました。



しかし、猪はおそって来ようとも逃げようともせずに、その場でじっとしていました。よく見るとその猪は足にケガをしていたのです。セイモルは言いました。

「きっと狼にでもおそわれて、このほら穴にかくれていたんだろう。」

猪のようすをじっと見ていた彦次郎はセイモルに言いました。
「ねえ、ケガの手当てしてあげて！」



セイモルは猪がケガしたところにキズ薬をぬって布を巻いてあげました。

「よし、このまま休んでいれば歩けるようになるよ。」
そうセイモルが言うのを聞いて彦次郎はほっとしました。

その夜、二人はこのほら穴の中で眠りました。



次の日、二人が目を見ますともう猪はいなくなっていました。彦次郎が旅のしたくをしていると、ほら穴の出口でセイモルがよびました。

「彦次郎、こっちに来てごらん。」

セイモルのところへ行ってみると、ひとにぎりほどのドングリが置いてありました。

「たぶん昨日の猪が集めてきたんだ。お礼のつもりかな？」



ほら穴を出てみると嵐はすっかりおさまって、空は雲ひとつない青空になっていました。

彦次郎は歩きながら、セイモルにたずねました。

「このドングリは食べられるの？」

「僕らには食べられないなあ。でも猪にとってはごちそうなんだよ。」

うれしそうにセイモルは言いました。

